

# 四

月末に、気仙沼市の内湾地区という、入り込んだ湾の最奥部にある小湾とその周辺地区（魚町・南町地区）を舞台にした復興まちづくりのコンペが行われた。一〇〇に迫る応募には、建設会社や設計会社の提案も含まれていたから、読者にも関係した方がいるだろう。

この地域も、昨年三月の津波で大きな被害にあった。筆者が、昨年四月初めに気仙沼に行った折、一ノ関からの国道で市内に入り、まず出会ったのはこの地区の被災した光景であった。船が打ち上げられ、栈橋が水没し、家々が流されたり、半壊していた。もともと港に面した商店のまちで、防潮堤もなかったから、海は目の前にあり、まさに海とともに生きてきただけに、津波で被災するのは避けられなかった。復興に当たって、まず決められたのが、六・二メートルの防潮堤を建設することであった。ここ一〇〇年程のうちでも何度か襲来しているような規模の津波（レベル1）に対しては防護する機能を持ち、今回のようなそれを超える津波（レベル2）が来れば乗り越えられるが崩壊はしないという機能を持った防潮堤がこの規模とされたのである。

防潮堤建設を担当する宮城県が提示したこの案は、地元で大きな議論を呼んだ。そして、もし六・二メートルの防潮堤が岸に沿って建設されれば、海と陸とは切断され、これまでの賑わいのあるまちは二度と戻らない。必要な防災機能を備えつつ、海と一体で発展してきたまちを壊さずに

## 各 人 各 説

# 気仙沼のコンペ

東京大学教授・日本学術会議会長

## 大西 隆

Takashi Onishi



復興する方法はないか、という考えが次第に共有されていったようだ。こうした地元の人々の考えを市が汲み取って、全国から知恵を集めようとコンペが企画された。一月に要項が公表され、二月下旬締切、三月に審査が行われた。しかし、ここではまともならず、四月末に、「全体としてまとまっている作品」と「個々のアイデアとして卓越している作品」という二部門で選定された計一〇提案のプレゼンテーションとヒアリングが行われ、最優秀賞他が決まった。

経緯からみて当然であるが、提案の大きなポイントには、防潮堤とまちを如何にして調和させるかであった。防潮堤をまち中の建築物と一体化させる方法、海岸沿いに防潮堤を造るが大規模施設や商業施設と一体型とする方法、防潮堤を丘状の公園の一部とする方法、さらに特殊な工法で可動式の防潮堤を湾内の海中に造り、陸には設けない方法など多様な工夫が並んだ。審査は、多くの地元の方々と、我々のような外部の専門家がそれぞれ一票を投じて行われ、結果は両部門で可動式防潮堤がトップになるというものであった。コンペの結果は、事業に直接結び付くものではなく、参考とされる。何十年にも及ぶ平穏な暮らしの中に、突然襲う津波に対する備えを如何に調和させて組み込むか、今回の舞台は気仙沼内湾地区であったが、共通性を持つ被災地は多い。コンペでの諸提案が、他の地域にも参考となることを願っている。